報徳文化研究所だより

(2023.12.10 報徳文化研究所)

大日本報徳社では、現在、報徳図書館に収蔵しているすべての資料を対象にして台帳整理（リスト化）作業を進めています。

収蔵資料の種類を大別しますと、以下の３種類に書類があります。

① 遠江国報徳社の時代から大日本報徳社の現代まで、本社が取組んだ報徳運動に関する活動資料や記録類。

② 地域の単位報徳社がどのような活動をしていたかを知る活動記録（現量鏡、総会資料等）と地域報徳社からの寄贈資料（記念誌等）。

③ 本社に関係した方々（岡田家文書、山崎常磐家文書、佐々井信太郎文書等）からの寄贈資料。

これらすべての資料が、今後の報徳文化研究所で行う調査研究の基礎資料になりますので、現在進めている台帳整理作業が重要な作業になります。現在、１階書庫の約２／３が未整理状態にありますので、しばらくは所蔵資料の台帳整理が重点的に進める作業になります。

なお、作業は運用資金の関係から、資料整理調査員の方々のボランティア的な協力により進めています。

資料整理作業の様子

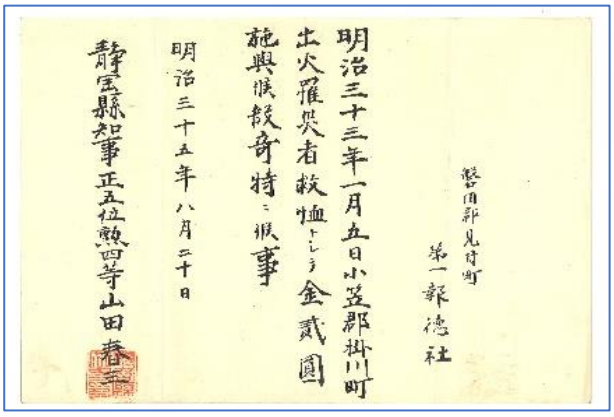
資料整理している中から、磐田市見付にあった「第一報徳社」の資料の一部を紹介します。

見付第一報徳社資料について（報告）

報徳文化研究所資料整理調査員　足立洋一郎

大日本報徳社に磐田市見付にあった見付第一報徳社の資料が寄贈され、現在調査を進めています。その史料群の概要と興味深い史料を紹介します。

第一報徳社の「記録簿」によれば、結社のきっかけは商用で訪れた羽鳥村の松島授三郎から小田吉蔵が報徳の話を聞いたことでした。これに深く感銘した小田は賛同者を募り１８７１（明治４）年１２月、社員１１人で「愛国社」を結社しました。愛国社は、１８７９（明治１２）年に「見付宿報徳社」と改称し、８４（同１７）



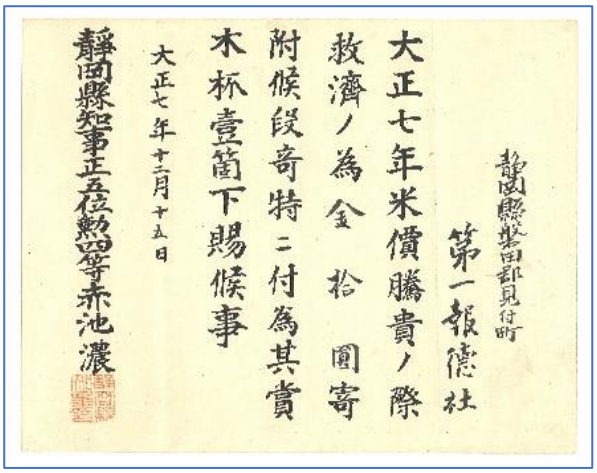
明治 35 年(1902)８月第一報徳社に贈られた掛川町出火罹災者救血褒状

年に遠江国報徳社第二館が見付町に設置された際に５０円を寄付し以後遠江国報徳社の監督を受けるようになりました。９０（同２３）年「見付町第壱報徳社」と改称、９８（同３１）年、民法に定める公益法人として認可されました。

第一報徳社資料には、社則や定款、事業報告や記録など報徳社経営に関する史料のほか現量鏡、口訳帳・仕訳帳、出納簿、台帳・元帳、報徳金調、報徳金借用証書、預金通帳など金銭に関する帳簿類や文書が大量にあります。また、雑誌類や書籍が多いのも特徴で、雑誌類では、報徳関係の「大日本帝国報徳」や「報徳学友会報」、「報徳の友」などが多数あります。書籍では富田高慶の「報徳記」や福住正兄の「富国捷径」、岡田良一郎の「報徳富国論」などの貴重な和綴本が多数保存されています。これらの史資料の大半は、大正期を中心に明治後期から昭和初期にかけてのもので、当時社長を務めていた小田吉蔵氏が主として保管していたものと思われます。

第一報徳社は、毎月の常会の開催や報徳金の積立、貸付など通常の活動のほか戦時の献納や災害時の義捐、寄付など社会活動も積極的に行っていました。第一報徳社資料には、これらの活動に対する褒状などが数点存在します。少し紹介します。

第一報徳社は、日露戦争の際軍需品を献納しましたが、その賞として木杯１個を下賜する旨を伝える１９０６（明治３９）年３月の静岡県知事からの褒状が残されています。また、１９０２（同３５）年８月に同じく県知事より出された褒状には、１９００（同３３）年１月５日の小笠郡掛川町出火の罹災者救恤として２円を「施与」したことは奇特であると記されています。さらに、１９１８（大正７）年１２月の県知事による褒状では、同年の米価騰貴の際救済のため１０円を寄付したことは奇特であるので木杯１個を下賜すると述べられています。この米価騰貴はシベリア出兵によるもので全国的に米騒動を引き起こしました。これら３点の史料は報徳社と社会の関わりを示す好史料です。


静岡縣榛原郡見付町
第一報徳社
大正七年米價騰貴ノ際
救濟ノ為金拾圓寄
附候段奇特ニ付為其賞
木杯壹箇下賜候事
大正七年十二月十五日
靜岡縣知事正五位勲四等赤池濃

大正７年(1918)12 月第一報徳社に贈られた米価騰貴救済褒賞

第一報徳社資料には、これら以外にも貴重な史資料が多数存在します。

【募金活動実施中】

報徳文化研究所の活動は、皆様の浄財によって運営しています。

ご寄付はいつでも受け付けておりますので、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

連絡先：（公社）大日本報徳社

☎（０５３７）２２－３０１６